

## 書 評 と 紹 介

崎山治男著

### 『「心の時代」と自己』

——感情社会学の視座』

評者：岡原 正幸

この書評を任された僕が待ち望んでいた、と言え、気恥ずかしいのですが、そんな気にさせる一冊が、崎山治男さんによって著されました。1980年代初頭より、感情社会学と呼ばれる新たな（新しいはずの）社会理論を追究してきた僕にとって、その書は飽きさせることなくウキウキさせてくれる内容となっています。その構成とはいえば、感情社会学の学説史ともいえる第Ⅰ部、感情の現代社会論といえる第Ⅱ部、そして第Ⅲ部として、感情労働としての看護労働に関する実証研究が配置され、バランスよく感情社会学の何たるかを知ることができます。また全体にわたって丁寧な論述がなされており、各章の末部にはその章の論点が要領よくまとめられており、読者の理解を助けてくれます。

論点も豊富です。たとえば、感情社会学史における「著名な」論争、実証主義VS構成主義、あるいはホックシールド（疎外図式）VSヴォウタース（インフォーマル化図式）などの議論について、紹介とともに独自の解釈的な解決案を提示してくれます。感情社会学にとっては厄介なお荷物だった生理的なメカニズムを感情社

会学理論がどのように位置づけたらいいのかについてもシンプルです。さらには、感情社会学者の90年代における態度の変容を指摘し、相対主義的な感情理解に対してどうするのか？感情語や生きられた体験をどう捉えどう考えるのか？といった論点にも明解かつ明快な論旨を展開してくれます。実証研究の部分では、丹念な聞き取りの中から、看護という感情労働の抱える諸問題や対処策や難点の具体的な姿を引き出しています。この点は言うまでもなく、感情社会学的な視角からなされたいまだ数少ない実証研究のひとつとして高く評されます。看護師が行う医療現場での感情管理の多様な姿はそれ自体が傾聴に値するものでもあります。

感情社会学が抱える多様な論点の工具箱であると形容したくなる本書なのですが、ここでは特に二つの事柄を描き出そうと思います。ひとつは僕が感心したアイデアについてであり、もうひとつは、僕を含めた旧世代(?)の感情社会学者へのある批判的な論述についてです。

感情管理。このコンセプトは感情社会学の大姉御ホックシールドがゴフマンやフロイトを経由して導き出したもので、いわば感情社会学のアルファでありオメガであるような位置づけを受けています。ですから、上下左右からの批判にも晒されるわけですが、この概念の生産性は高く、とくに市場労働との関連で感情労働として定式化されてからは、多様な研究領域や学問分野に登場するキコンセプトになりました。さて、崎山さんはこの概念に独特の色付けをします。まずは、クルターやシンボリック相互行為論の原点を参照しつつ、さらには社会的構築主義を駄目押しにして、感情管理という営為は個人の内にある生理を対象にしたものではな

く、むしろそれが相互行為的、間主観的な実践、言語的な実践としてあることを再確認します。

この点は重要です。というのはホックシールドが感情管理概念をゴフマンやフロイトに依拠させ、感情管理の方法として認知的・身体的・表出的なあり方を指摘するなどしたため、彼女の意におそらく逆らって、個人が自分の内部を対象にした心理的な操作としてのみ感情管理が理解されてしまったからです。そのため、一見すると、感情管理は社会学的なコンセプトであるかのような印象をもたれますが、実は社会的なファクターを考慮した心理学的な概念でしかなかったわけです。崎山さんはこの不確かさに相互行為的実践という鉄槌をくだすわけです。

さて、さらに彼の議論が面白くなるのは、現代の感情文化との絡みで感情管理を理解するくだりです。現代にあって、まさしくフロイト的言説の浸透のために、「トラウマ」以上に日常的な発想になったのは「抑圧される」という考えではないでしょうか。自分たちの感情をめぐって、抑圧されている、自然のまま、嘘だホントだ、という語彙を駆使して眺める癖を現代人は当たり前のようになっています。では、見てくれだけの演技ではなく、実際に感じているにもかかわらず、一方を作為的と見なし、他方を自然のままと見なすのはどうしてでしょうか。

実践としての感情管理という機制が「抑圧／自然」の感情経験という二項図式を構成するというのが崎山さんの回答です。そしてさらに大いなる社会の狡智を彼は見ます。それは二様の感情経験の受け皿としての「自己」を構成するということです。感情の歴史学や発達心理学、心の理論などが議論するように、感情と自己との関係は密接です。その関係を歴史化し、社会構造との関連性の中に位置づける試みが感情社会学には求められるでしょう。思い返せば、20年ほど前に僕もある著書の中で、社会が感情管

理を個々人に手渡しておいて、矛盾する感情規則に直面させるのはなぜかという問いを發し、その答えを「自己なるもの」の社会的構築に求めたことがありました。とはいえそれは着想の提示でしかなく、今回、崎山さんによってその件が定式化されたことを喜んでいきます。

では次、感情公共性です。僕が著書の中で、障がいをもつ人々との交流からの実地の体験と社会科学的な王道の関心事より造語したものの（とはいえ同時代的な関心を披露する人は多いのです）、その後、公共性／圏への関心の高まりとあいまって、予想外に散見するようになったアイデアです。

造語の際には、広義の感情労働者を主たる担い手としたらう1960年代以降の新しい社会運動の特徴を指摘する役割をももたせたのですが、その内実を明確に規定する作業は後回しにしていました。感情管理社会の進行の中で自律的な感情管理（ハーバマスを案内人にして脱慣習的な感情管理の可能性を問うわけですが）が実現されるそれも集合的に達成される道筋を担った場として感情公共性を夢見たわけです。障害者運動が、個人の感情体験をも支配する固定的な価値規範の体系を捉え返す文化運動であることを強く訴えたかった僕の思惑がそこには反映されていました。とはいえ僕の場合は、すでに経験した／している実感（障がいをもつ人々をめぐったもの）から感情公共性なるものがあるだろうと直観しただけで、それ自体をリサーチの対象にしたことはありませんでした。その意味でいえば、崎山さんが、旧世代の感情公共性観を批判するとしても、その論拠が看護師への具体的な聞き取り作業よりもたらされたことにまずは敬意を表したいと思います。

感情管理の再編を先駆的に議論した旧世代とは、僕と石川准さん（静岡県立大学）なのですが、崎山さんの批判は、僕たちの議論では「自

己の感情経験をただ先行させる」リスクを勘案してないというものです。もちろん崎山さんは僕たちの議論の射程である障害者運動を考慮して一定の留保をつけてくれるのですが、平たく言えば、個人的な感情の押しつけあるいは応酬にとどまり関係それ自体を破壊する危険性をもつ戦略でしかないというわけです。それに代わって「他者の生活史に根ざした感情管理への配慮をまず尊重することで、関係の断絶というコンフリクトを回避する。そして既存の感情管理のあり方を全否定するのではなく、相互行為場面の読み替えを図ることによって、個々人に多大なリスクを負わせることを回避する」というのが崎山案です。

崎山案を否定することはできません。その有効性もわかります。看護場面での実効性については全く疑問をもちません。ただ「広く現代社会の総体に通底しうる」モデルなのかと問われれば、留保したくなります。というのは、他者感情の不可知性から他者感情への配慮、気づきへと進むことがいかにして可能なかいかにして確保されるのかが不明だからです。他者感情の配慮から入る人がいる、他方で、そうでない人がいる。この両者が対面して、前者だけが配慮の鬼となり、後者は感情のフリーライダーとなる。そのような非対称性が追認されるのは両者に格差（社会的資源、専門的知識、権力、貨幣などをめぐる）がある場合ではないでしょうか。医療現場での対人関係はそもそも格差に満ち溢れています。だとしたらこのモデルを一般化することには慎重でありたいです。また、コンフリクトや関係の断絶が否定的であるのは、医療という閉じられた社会空間にも理由があるわけで、コンフリクトそれ自体が忌避される理由とは思いません。いささか旧世代ゆえの古い定式化を使わせてもらえれば、崎山さんの案は社会の「コンセンサスモデル」を念頭にしてお

り、僕や石川さんの案は「コンフリクトモデル」を下敷きにしているということでしょうか。

ただ以上は、社会総体を目指したモデルであるならばという条件付です。崎山さんも述べているように、彼の案と僕たちの案は時系列上に並べて接合することができます。「他者の感情管理への配慮を先行させることで・・・他者との相補的な関係が保たれた後にこそ、自他の感情経験への解釈の相違が対話実践の中で討議され、感情管理の脱慣習化へと向かうことが可能である」。僕の念頭にあった感情公共性もこれです。集まりの中で、ある人の表現する意固地さ、頑なさ、悲嘆、悲痛、怒りなどを、他の人たちが受け入れ（「立ち会う」）、この受け入れられるという安心と信頼が築かれたときに、みんなが感情規則や感情管理のあり方を議論するというものです。その中で、今まで自分が感じてきた感情を問題視することも生まれるわけです。

僕から見ると、崎山さんの主張と僕の主張に大きな隔たりを感じません。むしろ、旧世代の問題意識を整序し受け継ぎ、実証研究をベースにして豊かに膨らませた成果として、この書を受け入れたいと思います。たしかに彼が言うように、僕の論じ方の不鮮明さ（たとえば関係の断絶あるいは再構築に向かうコンフリクトを区別しないなど）に問題はあるでしょう。ただ、障害者運動を局面とした場合、関係の断絶を忌避したり、相手への配慮を優先させれば、決定的に命取りになるものがあつたということ、そして関係の断絶をも恐れないほどのコンフリクトこそが関係の再構築を生んだということ、この点に僕の論の不鮮明さの理由を求めてくれれば幸いです。

（崎山治男著『「心の時代」と自己—感情社会学の視座』勁草書房、2005年1月、x+262+xxvii頁、定価3900円+税）

（おかはら・まさゆき 慶應義塾大学文学部  
人間関係学系社会学助教授）